

平成 18 年 9 月 11 日

武庫川流域委員会
委員長 松本 誠様

武庫川流域委員会
委員 伊藤益義

提言書についての知事等発言と今後の対応について

提言書を提出したあとの知事発言（委員全員に配布）を見ました。

1. 知事の「武庫川流域委員会の提言でもフレームワークとしては 18 年確率でしか目標流量が達成できていない。我々は、30 年確率であげているので 30 年確率で 30 年間で整備しようとする、…」という発言

私たちは 30 年確率ではなく目標流量 3450+ m³/s を提言してきたはずです。ましてこの数値が 18 年確率ということは初めて聞く話で、これまでの全計で下流部の確率流量 17 年から見ると、この 2 年半私たちは何を検討してきたのでしょうか。

確率流量のみが一人歩きし始めますので、これらの数値の説明が明確にされなければなりません。

目標流量についての県の見解とのギャップをどう考えるか。

場合によれば終盤で指摘されてきた「流下能力」の再検討も必要になります。

2. 「専門的見地からの検証が十分に行われているかどうか、それはこれからの課題が多いので、そういう意味で専門的な検証が必要だ・・特に目標流量、治水安全度、流域対策の実現性とその効果量、既設ダム of 治水利用の実現性とその効果量、新規ダムの環境へ及ぼす影響などについて、…」

この問題は新しい知見あるいは新しいデータに基づく検証なら理解できますが、流域委員会開催中に検証ができなかったのでしょうか。

これらの方策を踏まえての提言ですからこれらが検証の結果白紙になれば、アイデアの提案にすぎなかったこととなります。専門家委員も参加されていたはずですから、何のための委員会だったのでしょ。もし専門部会が発足するなら、その検討内容については十分に公開していただきたい、部会のメンバーも公開してほしいと思います。

3. 知事発言の原本は事務局の作成したものと思われるが、そうとなればこれまでの委員会での河川計画課の参画はどういう意味があったのだろうか。委員会の意向を踏まえない背信行為ではないか。

4. また西宮市長は 4 日の市議会で「自然は時間をかけて復元が可能だが、奪われた人命は戻らない」と述べている（毎日新聞記事）。

これは私たちの提言が十分に理解されていないと思われ、西宮市に「構造物を作れば自然破壊は戻らない」、「穴あきダムはすべての降雨に対して万能ではない」等の説明が必要である。

以上